

藤野雄次●編集

松田雅弘、畠 昌史、田屋雅信●編集協力

そのとき理学療法士はこう考える

事例で学ぶ臨床プロセスの導きかた

評者 成田崇矢

健康科学大学健康科学部理学療法学科

新人理学療法士もベテラン理学療法士も「目の前の患者さんをどうにかしたい」と願い、そのなかで「理学療法士の専門性は何なのか」と自問自答している。しかし特に、経験の浅い理学療法士の多くは、国家試験対策で学んだなかにその答えが見つからず、路頭に迷っている。

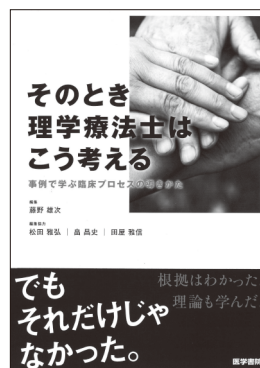
本書には、そのような理学療法士にできる限りの筋道を示したいという編集者の藤野雄次先生(埼玉医大国際医療センター)はじめ執筆された先生方の想いがあふれている。理学療法士は運動、動作を改善させる専門家であり、ADLの改善、QOLの向上を目的としている。本書はそれを達成するために必要な臨床推論や基本となる評価の活用法が明示されている。つまり、患者治療だけでなく、理学療法士としてのアイデンティティを捉えるヒントがまとめられているといえよう。

第1章では、理学療法の意義が述べられている。単に技術や知識だけではなく、人間的な要素が要求される仕事であることが理解でき、さらにはそのことが患者やその家族と接する際の臨床推論に大きくかわるという点を学べるようになっている。また、第2、3章では、対象者個人の思いや希望を受け止め、その人に合った理学療法を展開するうえでの根拠や考え方が整理されている。第4章では、中枢神経疾患、運動器疾患、内部障害、神経筋疾患、小児疾患、がん、ADLと分類したうえで、それぞれに必要な評価とその活用方法を明示し、さらには第6章で具体的な実践法について、疾患別の多様な事例を取り上げているところが本書の大きな特徴である。

第1～5章までで、臨床推論に対する思考の流れ(評価→統合と解釈)を整理でき、理学療法の基本を理解できる。また、第6章では多くの先生方による、豊富な診療経験を通して得られた知見が述べられているが、これらは単に一症例の事例報告にとどまら

ず、他の疾患や障害のある患者にも十分適用され得るものである。

本書は、さまざまな疾患に対する具体的な理学療法と臨床推論を明快に示した実践書であるとともに、従来の知識、技術のみを学ぶ理学療法に一石を投じる、エポック・メイキングな一冊である。



B5・244 頁

定価：本体 3,800 円＋税

医学書院刊、2017 年